

大学生の自己愛的傾向と親の養育態度・社会的比較志向性との関連

渡辺 弘純⁽¹⁾・岡 紋子⁽²⁾

Relations among Narcissistic Personality Traits, Parental Attitudes, and Social Comparison Orientation in University Students

WATANABE Hirozumi⁽¹⁾ and OKA Ayako⁽²⁾

The purpose of the present study was to identify factors comprising the covert features (Akhtar & Thomson, 1982) of traits associated with narcissistic personality, and to examine relations among these factors, parental attitudes, and social comparison orientation.

Three kinds of questionnaires were administered to 205 university students.

The major results were as follows: 1. The covert features of narcissistic personality traits consisted of three factors, specifically, a sense of worthlessness, an inordinate sensitivity, and a need for admiration. 2. Negative parental attitudes affected the social comparison orientation by increasing inordinate sensitivity and a need for admiration. 3. Though negative parental attitudes affected the sense of worthlessness, the sense of worthlessness did not affect the social comparison orientation.

Findings were discussed in the context of cultural-social characteristics of Japanese and interpersonal relationships.

Keywords : narcissistic personality traits, parental attitudes, social comparison orientation, university students

問 題

青年期は、自己愛的な傾向が高まる時期だといわれる。青年は、自己に強い関心を持ち、他者も同様に自己に関心を向けていると錯覚する、他者から見られている・注目されている、と感じるのである (Elkind, 1967)。小塩 (2004) は、「青年期初期の思考過程にみられる自己中心性は、青年期初期の自己愛として表れる」というBlos (1962; プロスノ野沢訳, 1971)などを引いて、青年期の自己愛的な傾向を論じている。そして、同じ著書で、Akhtar & Thomson (1982)の自己愛性人格障害の臨床的特徴を紹介している。Akhtarらは、臨床的特徴を、6つの領域

(1. 自己概念, 2. 対人関係, 3. 社会的適応, 4. 倫理・規範・理想, 5. 愛と性, 6. 認知スタイル)と2つの側面(顕在的な側面と潜在的な側面)に分けて提示している。これらは異なるタイプを示しているのではなく、また、意識的・無意識的側面を示すのでもなく、両者ともに意識されるものであるとしている。

われわれは、Akhtarらの6つの領域のうち、わが国でも一般的に自己愛的傾向の現れる領域と考えられている自己概念、対人関係、及び社会的適応の3つの領域を取り上げ、その潜在的な側面に焦点を当てて、自己愛的傾向を意味づけることにした。Akhtarらは、自己愛的傾向におけ

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

⁽²⁾ 島根県雲南市役所

る自己概念の顕在的な特徴として、慢心した自尊心、傲慢な誇大感、富・力（能力）・美・才気の空想、現実的な不死身の感覚を、潜在的な特徴として、過度の敏感さ、劣等感、無価値感、壊れやすさの感覚、強さと栄光への絶え間ない追求を、それぞれ挙げている。また、対人関係の顕在的な特徴としては、深さの欠如、他者の軽蔑と価値低下、ときに「栄光の孤立」を、潜在的な特徴としては、他者の慢性的な理想化と激しい羨望、絶賛への並外れた渴望を、さらに、社会的適応の顕在的な特徴としては、社会的成功、顕示性の補償としての昇華（偽昇華）、激しい野心を、潜在的な特徴としては、慢性的な倦怠感、不安定さ、専門的・社会的アイデンティティの不満足、それぞれ挙げている。ここで取り上げる自己愛的傾向における自己概念、対人関係、及び社会的適応の側面の潜在的な諸特徴は、Wink (1991) の自己愛の「傷つきやすさ・敏感さ」の因子や関口 (2003) の「他者評価過敏型自己愛傾向」と対応しているようにみえる。

宮下 (1991) は、自己愛が生まれる要因として、Kernberg (1975) や Kohut (1971) の指摘する幼少期の親の養育態度との関連に着目し、青年のナルシズム（自己愛）的傾向と母親や父親の養育態度、及び家庭の雰囲気との関係を検討している。彼ら（宮下・上地, 1985）が修正したNPI (Narcissistic Personality Inventory) (Raskin & Hall, 1979) 質問紙や Schaefer (1965) を参考に作成した母親・父親の養育態度質問紙や家庭の雰囲気質問紙（長島・藤原・原野他, 1967）を用いた調査をもとに、(1) 女子においては、母親の暖かい受容的態度が自己愛的傾向を抑制し、感情的・情緒不安定な態度がこれを増長させる、(2) 男子では、父親の養育態度を支配・介入的であったと認知するほど、女子では、父親の養育態度を暖かく受容的であったと認知するほど、それぞれ自己愛的傾向が高い、(3) 男女とも、家庭の雰囲気の「内閉・謙虚」因子が自己愛的傾向の低いことと、女子では、家庭の雰囲気の「冷淡・厳格」因子が自己愛的傾向の高いことと、それぞれ関係している、などの結果を報告している。しかし、自己愛的傾向と養育態度の関連を取り上げた研究は、この他にも多数報告されているが、必ずしも一貫した結果は得られていない。このため、たとえば、中村・松並 (2001) は、NPIの側面別に養育態度との関連が異なる可能性を指摘している。

一方、Akhtarらの自己愛的傾向は、多様な人格的諸特徴を生み出したり、それらと結びついたりしていると考えられる。たとえば、その潜在的な側面である自己概念や対人関係は、過度な敏感さや劣等感、他者の慢性的な理想化と激しい羨望などに見られるように、他者を意識したり、

他者と自己を比較したりする傾向が強いことを示している。すなわち、社会的比較との関連が想定される。社会的比較は、Festinger (1954) 以来の研究史を持っているが、最近では、社会的比較志向性尺度 (Scale of Social Comparison Orientation: Gibbons & Buunk, 1999) が提案され、外山 (2002) によるその日本語版も作成されている。この他、自己愛的傾向の潜在的な側面の絶賛への並外れた渴望や過度な敏感さなどを取り上げると、Burns (1980)、辻 (1992)、Hewitt & Flett (1991)、桜井・大谷 (1997) などによる完全主義 (Perfectionism) との密接な関係も考えられる。

この研究においては、大学生の自己概念・対人関係・社会的適応における潜在的な側面から見た自己愛的傾向の諸側面（因子）を明らかにすることを、第1の目的とした。ついで、ここで捉えられた自己愛的傾向が親の養育態度と関係していること、すなわち、統計的には、親の養育態度が、自己愛的傾向を規定していることを示すことを、第2の目的とした。その上で、自己愛的傾向が社会的比較志向性と関連していること、統計的には、親の養育態度が自己愛的傾向を介して社会的比較志向性に影響していることを示すことを、第3の目的とした。

方法

1. 調査への参加者

地方国立大学の学部学生225名に調査用紙を配布し、男子106名、女子99名、計205名から回収した。学部別の内訳は、教育学部98名、理学部91名、その他16名であった。また、2年生と3年生が179名で約87%を占めていた。回収率は、約91%であり、全問回答者は、176名で、約86%であった。

なお、調査は無記名で行われ、調査用紙上に、「誰がどのように答えたかはわかりません」、「研究の目的だけに使い、それ以外の目的のために使われることはありません」と記載されていた他、口頭でも、プライバシー保護などについて誓約された。次いで、調査への協力を約束した回答者だけを対象にして、調査用紙が配布され、回答後に調査用紙が回収された。調査用紙の回収に際しては、投票箱に模した回収箱が2箇所に設置され、個人が特定できないように工夫されていた。

2. 調査内容の構成

調査は、質問紙に回答する形で実施された。質問紙は、(1) フェイスシート、(2) 自己愛の潜在的な側面を構成する調査項目群、(3) 養育態度尺度、(4) 社会的比較志

向性尺度から構成されていた。

(1) フェイスシート：調査実施日、年齢、所属学部、学年を記入し、性別は当てはまる方に○をつけることを求めた。

(2) 自己愛の潜在的な側面を構成する調査項目群：Akhtar & Thomson (1982)の自己愛性人格障害の臨床的特徴の潜在的な側面の自己概念、対人関係、及び社会的適応の3つの観点から調査項目群を作成した。

自己概念については、「自己についての過敏さ・脆弱さ」と「劣等感・無価値感」の2つに分けて、各12項目ずつ作成した。「自己についての過敏さ・脆弱さ」は、「些細な失敗でも、重大なことに失敗したかのように落胆する」、「少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する」などの項目から、また、「劣等感・無価値感」は、「自分は生きていく価値のない人間だと感じる」、「他の人と自分を比べると、自分のことが嫌になる」などの項目から構成された。

対人関係については、他者の慢性的な理想化と激しい羨望、絶賛への並外れた渴望などの特徴を考慮して、「みんなから特別な人だと思われたい」、「私は今よりももっと、他者から認められる人になりたい」などの13項目から構成された。

社会的適応については、慢性的な倦怠感・不安定さ、専門的・社会的アイデンティティの不満足などの特徴を考慮し、「生きているのが面倒くさいと感じることがある」、「今までの人生がそうであったように、これからの人生もつまらない人生だろうと感じる」などの13項目から構成された。

これらの全体で50項目にわたる調査項目群の作成に際しては、相澤(2002)の「自己愛的人格項目群」、清水・海塚(2002)の「対人恐怖心性尺度」、中山・中谷(2006)の「評価過敏性—誇大性自己愛尺度」、小島・大田・菅原(2003)の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」、小塩(2004)の「自己愛人格目録短縮版」、上地・宮下(2005)の「自己愛的自己脆弱性尺度」を参照した。

なお、評定は、リッカート尺度の「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で行われ、5～1点が与えられた。

(3) 養育態度尺度：Schaefer(1965)を参考に、宮下(1991)が作成した母親・父親の養育態度を測定する質問紙の30項目対を、そのまま採用した。これらの項目は、「支持的な—支持的でない」、「いらいらした—落着いた」、「やさしい—冷たい」、「厳しい—甘い」などから構成されている。

ただし、質問紙に回答するに際して、はじめに、「あなたの小学生までの生活史を振り返り」と述べ、ついで、その時期の「最もあなたの世話をしてくれた養育者」を問うた後、その養育者の養育態度を問う点で、宮下とは異なっている。

なお、評定は、「どちらともいえない」を中心として、「まあまああてはまる」、「よくあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の7段階で、各項目に1～7点を与えた。

(4) 社会的比較志向性尺度：Gibbons & Buunk(1999)の尺度をもとに、外山(2002)によって日本語版が作成された社会的比較志向性尺度11項目を用いた。

「自分の親しい人の状況と、他の人の状況をよく比べる」や「他の人とお互いの意見や経験について話すのが好きだ」など、能力比較と意見比較の項目から構成されている。

なお、評定は、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階で、逆転項目を逆転した後、各項目に1～5点を与えた。

3. 調査の時期と場所、及び手続き

2009年7月と10月。教職科目(生徒指導論)の授業後に、前述したように、プライバシー保護などについて誓約し、調査への協力を約束した学生に、授業で使用した教室に残ってもらって、調査を実施した。所要時間は、約20分であった。なお、当時、授業に密接に関わる内容以外の調査は行わないことにしていたため、地方大学であるという特性と相俟って、同様な内容の調査体験は多くないと推測された。ここでは、自己愛に関わる内容について、調査後に講義された。

結果

1. 自己愛傾向の潜在的な側面を測定する尺度の作成

自己愛の潜在的な側面に関する50の調査項目について、最尤法による探索的因子分析を行ったところ、固有値1以上の9つの因子が認められた。しかし、固有値の減衰曲線は、第3因子と第4因子間で大きく減衰していた。また、項目作成は、「自己概念」、「対人関係」、及び「社会的適応」の3つの面から行われ、3因子が想定されていた。そこで、固有値2以上の3因子解を採用して、最尤法による因子分析をし、プロマックス回転を行った。回転後、因子負荷量が.40以上の項目を、各因子を構成する項目とした。また、複数の因子に負荷し、因子負荷量の絶対値の差が.1以下の項目を除去することにした。

その結果、第1因子19項目、第2因子17項目、第3因子8項目となった。信頼性係数は、第1因子 $\alpha = .941$ 、第2

因子 $\alpha = .927$, 第3因子 $\alpha = .843$ であった。全ての因子について、十分な信頼性を得ることができた。

第1因子は、「自分はからっぽで薄っぺらい人間だと感じる」など、自己概念の無価値感と社会的適応の慢性的な倦怠感・不安定さを併せた項目群から構成されていたので、「無価値感」因子と命名した。第2因子は、「些細な失敗でもいつまでも気にしてしまう」などの項目が高い負荷量を示したので、「過度の敏感さ」因子と命名した。第3因子は、「私は、偉い人だと言われる人になりたい」などの項目が高い負荷量を示したので、「羨望への欲求」因子と命名した。

これらの3つの因子を潜在変数とし、各因子に含まれる合計44項目を観測変数とする確認的因子分析を行った。その結果、1%水準で全て有意である推定値(標準化推定値)が得られたが、このモデルの適合度指標は、 $\chi^2(899) = 1899.583$, CFI = .800, RMSEA = .074となり、不十分であった。

そこで、Muncer & Ling, (2006)の方法を採用し、複数の因子に負荷量.240以上で負荷している項目を除去し、各因子の負荷量が.40以上である項目から、高い順に5項目ずつ選択して、各因子を構成する項目として確認的因子分析を行った。その結果を示したのが、図1である(観測変数と誤差変数を除く)。ここでのモデルの適合度指標は、それぞれ $\chi^2(87) = 166.761$, CFI = .933, RMSEA = .067となった。

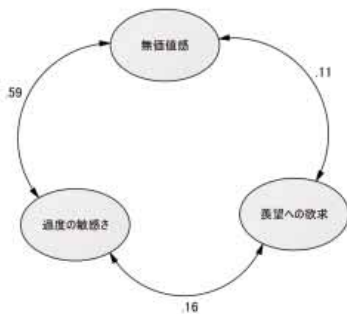


図1. 自己愛的傾向の確認的因子分析結果
(観測変数と誤差変数を省略)

各因子に含まれる観測変数は、以下の通りであった。第1因子：無価値感は、「自分は生きている価値のない人間だと感じる」、「自分はからっぽで薄っぺらい人間だと感じる」、「自分は世の中に役立つ人間になどなれはしない」、「落ち込んだり、悩んだりすると、すぐに自分はもう生きていけないと思うことがある」、及び「私は無力感を感じ

ることがある」から構成されていた。第2因子：過度の敏感さは、「些細な失敗でもいつまでも気にしてしまう」、「自分は何事においても気にしやすいたちだと思う」、「些細な失敗でも、重大なことに失敗したかのように落胆する」、「自分はたやすく傷ついてしまう」、及び「何かにつけ、他の人の方が上手くやっているように感じる」から構成されていた。そして、第3因子：羨望への欲求は、「みんなから特別な人だと思われたい」、「私は、偉い人だと言われる人になりたい」、「私は今よりもっと、他者から認められる人になりたい」、「みんなから注目され、愛される有名人になりたい」、及び「自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる」から構成されていた。各因子の信頼性係数は、無価値感因子が $\alpha = .831$, 過度の敏感さ因子が $\alpha = .837$, 及び羨望への欲求因子が $\alpha = .809$ であった。

これらの値は、十分信頼できる値であると判断されたので、今後は、この尺度をもとに、検討を進めていくことにした。

無価値感因子5項目、過度の敏感さ因子5項目、羨望への欲求因子5項目の得点をそれぞれ加算し、因子の総得点を算出した。表1はその総得点の平均値を性別に示したものである。この総得点について、各因子に性差があるかどうかを検討するために、t検定を行った。その結果、「無価値感」因子 ($t(203) = -1.968, p < .1$)には、女子の得点が男子の得点よりも高い傾向が認められ、「過度の敏感さ」因子 ($t(203) = -2.819, p < .01$)では、有意差があり、女子の得点が男子の得点よりも高く、「羨望への欲求」因子 ($t(202) = 2.006, p < .05$)では、有意差があり、男子の得点が女子の得点よりも高いという結果が得られた。

表1. 自己愛的傾向の各因子の総得点の平均 (M) と標準偏差 (SD) (Nは人数)

因子	男子			女子			全体		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
1	106	11.39	4.05	99	12.65	5.08	205	12.00	4.61
2	106	15.53	4.65	99	17.32	4.40	205	16.40	4.60
3	105	15.72	4.61	99	14.51	3.94	204	15.13	4.33

2. 養育態度尺度について

養育態度尺度の30項目について、最尤法による探索的因子分析を行った。固有値1以上の7因子が認められたが、宮下(1991)と同様3因子を想定していたこと、及び固有値の減衰曲線から、固有値2以上の3因子解を採用して、プロマックス回転を行った。そして、因子負荷量が.40以上の項目を、各因子を構成する項目とした。その結果、第

1 因子14項目 ($\alpha = .886$), 第2 因子6 項目 ($\alpha = .744$), 及び第3 因子5 項目 ($\alpha = .759$) が得られた。宮下を参考に因子名をつけ, 第1 因子「情緒的不支持・非受容」, 第2 因子「非支配・非介入」, 及び第3 因子「情緒的安定」とした。なお, 宮下とは逆方向の得点化をしたため, 因子名が逆転している。

これをもとに確認的因子分析を行ったところ, 1%水準ですべて有意である推定値(標準化推定値)が得られたが, モデルの適合度指標はそれぞれ, $\chi^2(272) = 947.319$, $CFI = .658$, $RMSEA = .110$ となり, 不十分なものであった。そこで, Muncer & Ling (2006) の方法を採用し, 複数の因子に因子負荷量.250以上で負荷している項目を除去し, 各因子において, 因子負荷量が.40以上である6 項目, 4 項目, 及び3 項目を, 各因子を構成する項目とした。そして, 再度, 確認的因子分析を行ったところ, 適合度はそれぞれ $\chi^2(62) = 10.351$, $CFI = .922$, $RMSEA = .062$ となった。また, α 係数は, 情緒的不支持・非受容が $\alpha = .808$, 支配・介入が $\alpha = .687$, 及び情緒的安定が $\alpha = .676$ となった。なお, α 係数が.70に届かないことから, 信頼性が必ずしも十分であるとはいえないが, α 係数の低下は, 原尺度の洗練による項目数の減少によって生じたものであり, 試行的検討を進めるに際しては許容範囲にあると判断し, このまま検討を進めることにした。

各因子に含まれる観察変数は, 以下の通りであった。第1 因子: 情緒的不支持・非受容は, 「支持的な-支持的でない」, 「信頼する-信頼しない」, 「肯定的な-否定的な」, 「にこやかな-無表情な」, 「個性を尊重する-個性を尊重しない」, 及び「子供中心の-大人中心の」から構成された。第2 因子: 非支配・非介入は, 「厳しい-甘い」, 「統制的な-非統制的な」, 「指示的な-非指示的な」, 及び「保護的な-自由な」から構成された。第3 因子: 情緒的安定は, 「いらいらした-落ち着いた」, 「感情的な-理性的な」, 及び「でしゃばりな-謙虚な」から構成された。

3. 社会的比較志向性尺度について

社会的比較志向性尺度の11項目について, 最尤法による探索的因子分析を行った。固有値1以上の3 因子が認められたが, 外山(2002)と同様2 因子を想定していたこと, 及び固有値の減衰曲線から, 2 因子解を採用してプロマックス回転を行った。そして, 各因子とも因子負荷量.40以上の項目を, 各因子を構成する項目とした。

第1 因子は, 6 項目 ($\alpha = .816$) から, 第2 因子は, 3 項目 ($\alpha = .760$) から構成された。外山にならって, 第1 因子を「能力比較」, 第2 因子を「意見比較」とそれぞれ

命名した。両者の相関は.274であった。

続いて, 能力比較と意見比較を潜在変数とし, 各因子に含まれる9 項目を観察変数とする確認的因子分析を行った。このモデルの適合度指標は, $\chi^2(26) = 54.276$, $CFI = .947$, $RMSEA = .073$ であった。

各因子に含まれる観察変数は, 以下の通りであった。第1 因子: 能力比較は, 「他の人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるか, いつも気にしている」, 「何かに対して自分がどのくらいうまくできたのかを知りたいときには, 他の人のやったことと自分のやったことを比べる」, 「自分がどのくらい社会的であるかを, 他の人とよく比べる」, 「自分の親しい人の状況と, 他の人の状況をよく比べる」, 「あまり自分と他の人を比べるほうではない(逆転項目)」, 及び「今まで自分がやりとげたことについて, 他の人とよく比べる」から構成された。第2 因子: 意見比較は, 「私は, 他の人だったら同じ状況でどうするのかをいつも知りたい」, 「何かについてもっと知りたいと思うとき, それについて, 他の人が何を考えているのかを知ろうとする」, 及び「自分と似たような問題に直面している人が, 何を考えているのかを知ろうとする」から構成された。

4. 養育態度と自己愛的傾向の関連について

この研究で取り上げられ, 確認的因子分析によって, 一定のモデルの適合度指標が得られた養育態度の各因子が自己愛的傾向の各因子を統計的に規定しているかどうかを共分散構造分析によって検討した。図2は, その結果を示したものである。

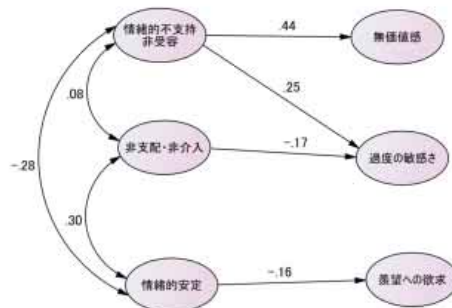


図2. 養育態度と自己愛的傾向の共分散構造分析 (観察変数と誤差変数を除く)

情緒的不支持・非受容から無価値感へのパスは, 0.1%水準で, 情緒的不支持・非受容から過度の敏感さへのパスは, 1%水準で, それぞれ有意であった。また, 情緒的安定から羨望への欲求へのパスは, 5%水準で有意であった。加えて, 非支配・非介入から過度の敏感さへのパスには,

有意な傾向が認められた。

このモデルの適合度指標は、 $\chi^2(338)=583.279$, CFI=.871, RMSEA=.060であった。

5. 自己愛的傾向と社会的比較志向性との関連について

確認的因子分析によって、一定のモデルの適合度指標が得られた自己愛的傾向の各因子が社会的比較志向性の各因子を統計的に規定しているかどうかを共分散構造分析によって検討した。図3は、その結果を示したものである。

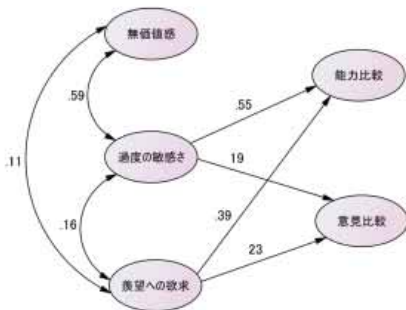


図3. 自己愛的傾向と社会的比較志向性の共分散構造分析 (観察変数と誤差変数を除く)

過度の敏感さと羨望への欲求は、ともに、能力比較へのパスが0.1%水準で、意見比較へのパスが5%水準で、それぞれ有意であった。

このモデルの適合度指標は、 $\chi^2(243)=364.079$, CFI=.933, RMSEA=.049であった。

6. 養育態度から自己愛的傾向を経て社会的比較志向性へという全体枠組み

確認的因子分析によって、一定のモデルの適合度指標が得られた養育態度と自己愛的傾向と社会的比較志向性の各因子が、全体としてどのような枠組みの中に位置づけられるか、試みに共分散構造分析によって検討した。図4は、その結果を示したものである。

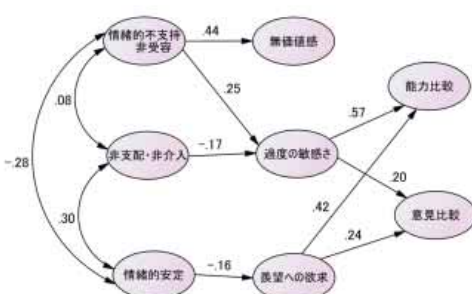


図4. 養育態度と自己愛的傾向と社会的比較志向性の全体枠組み

この適合度指標は $\chi^2(618)=926.588$, CFI=.879, RMSEA=.049であった。

全体を見ると、次のことが示されていることがわかる。
 (1) 養育態度：情緒的不支持・非受容は、自己愛的傾向：無価値感に正の影響を与える。そして、(2) この養育態度は、自己愛的傾向：過度の敏感さに正の影響を与え、これを介して、社会的比較志向性：能力比較と意見比較に正の影響を与える。また、(3) 養育態度：非支配・非介入は、自己愛的傾向：過度の敏感さに負の影響を与え、これを介して、社会的比較志向性：能力比較と意見比較に影響を与える。加えて、(4) 養育態度：情緒的安定は、自己愛的傾向：羨望への欲求へ負の影響を与え、これを介して、社会的比較志向性：能力比較と意見比較に影響を与える。

要約的討論

1. 自己愛傾向の潜在的な側面を測定する尺度

地方都市の大学生を対象とする調査から、自己愛的傾向における自己概念、対人関係、及び社会的適応における潜在的な側面を捉える尺度を構成することを試みた。資料の確認的因子分析の結果から、この尺度が、無価値感、過度の敏感さ、及び羨望への欲求の3つの因子から成り立つことが示された。そして、この尺度は、予想されたように Wink (1991) の自己愛の「傷つきやすさ-敏感さ」の因子など、自己愛的傾向の負の側面と関連があると推測された。

2. 自己愛的傾向と親の養育態度・社会的比較志向性との関連

共分散構造分析から、統計的には、親の養育態度が、自己愛的傾向を規定していることが示された。すなわち、情緒的不支持・非受容という養育態度は、無価値感と過度の敏感さという自己愛的傾向が高いことに結びついていた。非支配・非介入という養育態度は、過度の敏感さという自己愛的傾向を低くする方向へ、また、情緒的安定という養育態度は、羨望への欲求という自己愛的傾向を低くする方向へ、それぞれ作用するのではないかと推測された。

さらに、共分散構造分析から、統計的には、自己愛的傾向が、社会的比較志向性を規定していることも明確に示された。すなわち、過度の敏感さや羨望への欲求という自己愛的傾向が、能力比較や意見比較という社会的比較志向性が高いことに結びついていた。

全体の検討から、親の養育態度が、自己愛的傾向を規定し、これを介して、社会的比較志向性に影響を与えるという当初の予測が支持されたと考えられる。

3. 今後の課題

(1) 自己愛的傾向全体を1つのものとして捉えるべきか、2つの側面から捉えるべきか：自己愛的傾向を、1つの傾向として捉える考え方が有力になっているといわれる。たとえ2つに見えたとしても、それは自己愛的傾向がバランスを崩した状態であり、ある場合には誇大性が表面化し、他の場合には過敏性や傷つきやすさが表面化した姿であると見ることもできる。その一方、中山(2011)は、2種類の自己愛を区別する必要があると述べているように見える(落合, 2009)。多少とも「健康な」自己愛と「健康的でない」自己愛にそれぞれ関連を持つ誇大型の自己愛と過敏型の自己愛の区別である。とりわけ日本の青年を取り上げる場合には、諸外国の青年とは異なり、「健康的でない」自己愛としての過敏型が問題になるのかもしれない。

(2) 対人関係として、養育態度ばかりでなく、友人関係その他の親密な人間関係との関連において、自己愛を検討すべきではないか：従来、自己愛的傾向は、親の養育態度との関連のもとに生まれると考えられ、研究が蓄積されてきている。しかし、乳幼児期や児童期以後の友人関係や夫婦関係などの親密な人間関係は、自己愛的傾向に大きな影響を与えると考えられる。この研究では、社会的比較志向性との関連を取り扱ったに留まるが、一群の青年において、「不健康な」自己愛からの脱却が求められているとすれば、対人関係を通じての自己愛の変化の様相をも問題にしておく必要があると考えられる。

なお、統計処理は、SPSS16.0J及びAmos7.0Jによって行なわれた。

文 献

相澤直樹(2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.

Akhtar, S., & Thomson, J. A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.

ブロス, P./野沢栄司(訳)(1971). 青年期の精神医学 誠信書房(Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.)

Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, Nov., 34-52.

Elkind, D. (1967). Egocentrism in adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.

Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparisons: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 129-142.

Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 456-470.

上地雄一郎・宮下一博(2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的自己脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91.

Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Aronson.

コフート, H./水野信義・笠原嘉(監訳)(1994). 自己の分析 みすず書房(Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.)

小島弥生・大田恵子・菅原健介(2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.

宮下一博・上地雄一郎(1985). 青年におけるナルシシズム(自己愛)的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学, 1, 51-61.

宮下一博(1991). 青年期におけるナルシシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関連 教育心理学研究, 39, 455-460.

Muncer, S. J., & Ling, J. (2006). Psychometric analysis of the empathy quotient (EQ) scale. *Personality and Individual Differences*, 40, 1111-1119.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道(1967). 自我と適応の関係についての研究(2) -Self-Differentialの作製- 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.

中村晃・松並知子(2001). 自己愛と親の養育態度 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 341.

中山留美子・中谷素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.

中山留美子(2011). 自己愛の誇大性と過敏性 小塩真司・川崎直樹(編著)自己愛の心理学 金子書房, 54-69.

小塩真司(2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版

落合萌子(2009). 2種類の自己愛と自尊心、対人不安との関係 パーソナリティ研究, 18, 57-60.

Raskin, R., & Hall, C.S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.

桜井茂男・大谷佳子(1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.

Schaefer, E. S. (1965). Children's report of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.

- 関口愛 (2003). 自己愛傾向と自己受容の関係についての検討—健康な自己愛と不健康な自己愛という視点から— 心理学専攻紀要 (明治学院大学大学院文学研究科) 8, 71-72.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 外山美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連—社会的比較志向性尺度を作成して— 筑波大学心理学研究, 24, 237-244.
- 辻平治郎 (1992). 完全主義の構造とその尺度の作成 甲南女子大学人間科学年報, 17, 1-14.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.

(2012年11月20日受稿, 2012年11月30日受理)